

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12344

研究課題名(和文)近代フランスにおける芸術の生成空間の表象：書斎、暗室、アトリエ、サロン

研究課題名(英文)Representation of the creative space in Modern France : library, darkroom, atelier and salon

研究代表者

福田 美雪(寺嶋美雪)(FUKUDA, MIYUKI)

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：90632737

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近代フランス社会において急速に発展した都市空間と私空間の往来という体験が、芸術家にいかなるインスピレーションを与え、創作物に反映されたのかを考察した。おもにバルザック、フローベール、ゴンクール兄弟、ゾラのテキストを手がかりに、内と外をつなぐ親密な「私空間」として、小説家の書斎、写真家のスタジオ、芸術家のアトリエ、社交家のサロンという4つの類型に着目した。当時の芸術運動や社会的背景を踏まえて、それぞれの空間が文学、工芸、絵画・彫刻、音楽などの諸芸術が交錯し、作品創造を促す領域であったことを明らかにした。研究期間中に3度フランスに滞在し、口頭発表2本、論文5本、共著1本の成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、フィリップ・アモンやバーバラ・スタフォードらの先行研究に着想を得て、近代フランス文学における「私空間」表象の多様性を解き明かすことを目的としていた。しかし、書斎や写真スタジオ、アトリエ、サロンの公的・私的な両義性を分析するにつれ、パリ大改造に伴う建築術の発展、写真術の発明、パリ万国博覧会が促した音楽の大衆化やジャポニズムの流行など、きわめて広範囲の社会現象について論じることになった。結果的には、伝統的な諸芸術と産業芸術などが複雑に絡み合い発展する、19世紀特有の社会的文脈を明らかにすることができた。芸術、歴史、社会と多領域の研究者と協同し、今後さらに研究が発展することは確実である。

研究成果の概要(英文)： In this study, we examined how the experience of coming and going between "public space" and "private space", which developed rapidly in modern French society, inspired artists and was reflected in their creations. Drawing mainly on texts by Balzac, Flaubert, the Goncourt brothers and Zola, we focused on four types of "private space" that connected the "inside" and the "outside": the novelist's study, the photographer's studio, the artist's atelier, and the socialite's salon.

Based on the artistic movement and social background of the 19th century, we clarified that each of these spaces was an area where various arts such as literature, crafts, photography, painting and music continuously intersected and encouraged the multiple creation of artworks.

We stayed in France three times during our research period, resulting in two oral presentations, five papers, and one co-authored book.

研究分野：文学(ヨーロッパ文学)

キーワード：エミール・ゾラ オノレ・ド・バルザック エドモン・ド・ゴンクール 美術批評 パリ万国博覧会
ダゲレオタイプ ジャポニズム パリ大改造

1. 研究開始当初の背景

近代フランスの都市空間における、「公」と「私」の領域に最初に着目したのはベンヤミンである。その後も、フィリップ・アモンは『イマジユリー』において、19世紀の文学的想像力は、街路やアトリエに出現した多数のイメージの競合によって織りなされたことを明らかにし、バーバラ・スタフォードは『アートフル・サイエンス』において、都市に氾濫し、室内に蒐集される科学的・芸術的イメージの融合が、フランスのみならず19世紀ヨーロッパ全体を特徴づける文化的潮流であることを明らかにした。いっぽう社会学者のモニク・エレブやペルラ＝セルフアティ・ガルゾンらの研究は、「快適に住まうこと」に対するブルジョワ階級の強い関心が、第二帝政期から第三共和制期において発展した「私空間」の細分化と多機能化の原動力であることを実証している。

このように、近代都市の誕生とそれに伴う私空間に対する認識の変化は、私空間にまつわる主題やそれをめぐるモチーフ、バルザックの言葉を借りれば「私生活情景 *scènes de la vie privée*」が、まさにこの時期文学や美術の領域でも頻繁に取り上げられるようになるのだ。しかし、日本においてもフランスにおいても、「私空間」全般に目配りしながら、「芸術の生成空間」という観点から「書齋」、「写真スタジオ」、「アトリエ」、「サロン」の共通点と差異に着目した研究は見当たらない。また、「近代」という広いスパンにもとづいて複数の作家・作品を比較研究するというより、個別の作家・作品の分析に留まる傾向があった。それゆえ本研究では、まずバルザックからゾラに至るまでの写実主義・自然主義作品に焦点を当て、同時代の科学と芸術、産業と社会の動向のダイナミックな流れを浮き彫りにすることを試みることにした。

2. 研究の目的

近代フランスの芸術家は、さまざまな機能をもつ私的空間を、オブジェや想像力をよりどころにイメージが増殖する場として表象してきた。本研究では、産業革命と大量消費社会の到来により、視覚的イメージの飽和を避けられぬ近代フランスにおける芸術のあり方の変化について考察する。とくに、ロマン主義から象徴主義までの作品が描く私的空間を、「文学者の書齋」「写真家のスタジオ」「芸術家のアトリエ」「社交家のサロン」という4つの類型に分類し、その共通点と差異を分析する。「閉じた箱」でありながら、扉や窓を媒介に外と連結する構造をもつこれらの居住空間は、それぞれがイメージやことばの生成現場であり、芸術が創造され受容される場であった。

どんな文学者のテキストであれ、その生成過程において既存の図像やシンボルに着想源を持たないものはない。19世紀には、名画のレプリカ、地図や土産物、骨董品、絵八ガキや風景写真、新聞雑誌などのイメージが、上記4タイプの私空間には溢れていた。18世紀末から20世紀初頭の近代社会において、私的空間に氾濫し連鎖するイメージは、芸術家の想像力にいかにかきかけ、室内と外界を連結させて「空間のイメージ体系」を形成したのかを明らかにする。とくにバルザック、サンド、ゴンクール兄弟、ゾラなど、同時代の芸術家と盛んに交流し、批評活動を活発に行った文学者のテキストを扱う。

3. 研究の方法

基本的には文献調査による学術論文の執筆を継続的に行った。テキストのコーパスは当初予定より広く取り、画家ドラクロワ、フロマンタン、アモリー・デュヴァルの回想録、ポール・ド・コックやゴッティエによる新聞・雑誌記事、バルザック、ミュルジェール、ゴンクール兄弟、ゾラ、モーパッサン、ユイスマンスなどの作品を比較検討の対象とした。これらの作家、画家はいずれも、19世紀の社会・文化的背景を創作活動に反映させることで、当時の美術潮流に影響をもっており、本研究主題の対象として興味深い。

初年度(2018年度)は、ゾラの「メダンの家」が文学サロンとしてどのような権威をまとい、フローベールやゴンクール兄弟の文学サロンと差別化されていたのかを、短編集『メダンの夕べ』(1880)刊行前後の文壇の状況を踏まえて調べた。現存する邸宅記念館の装飾や調度、その成り立ちについても確認した。また、フローベール、ゾラ、プルーストなど、書齋にいながら外界の刺激に敏感だった作家たちの、「室内」における音の表現についても分析した。

2年目(2019年度)には、19世紀後半の社会的状況に眼を向け、ジョルジュ・サンドの『黒い町』(1861)とエミール・ゾラの『夢』(1888)を手がかりに、第2回・第3回パリ万国博覧会前後のジャポニスムが後押しした芸術の大衆化・産業化に接した文学者の反応を調べ、芸術と産業を対立するものではなく融合・調和すべきものとして捉えていたことを明らかにした。

3年目(2020年度)はコロナ禍によって予定した研究計画は実施できなかったが、リアリズム文学研究会主催のシンポジウム「室内 私空間の近代」(2021年1月24日)にお

において「近代フランスの芸術家小説が描く「創造の場」と題し、バルザックの『知られざる傑作』(1834)、ゴンクール兄弟の『マネット・サロモン』(1866)、ゾラの『制作』(1886)を比較しながら論じた。同時代の「アトリエ画」も参照し、19世紀に細分化された私空間のなかでも、とりわけ画家・彫刻家のアトリエが、「公」と「私」が交錯する雑居的な空間であり、「芸術作品が生成する場」として重要であったことを論証した。

コロナ禍が続いた4年目(2021年度)は、オンライン研究会やシンポジウムを活用しながら、社交サロンにおける音楽受容と観劇文化の発展について、とくにゾラの『ナナ』(1880)、『制作』(1886)に現れるオッフェンバックとワーグナー評を手がかりに考察した。また、リアリズム文学研究会のオンラインシンポジウム「旅するリアリズム 近代文学における外部世界との接触」(2022年1月22日)において、コメンテーターとして登壇した。

コロナ禍による延長を申請した5年目(2022年度)は、これまで絵画・音楽を中心としてきたアプローチから、写真術の発明を通じた科学と芸術の競合に眼を向け、文学と「写真スタジオ」の関係について論じた。ダゲールやナダールがその発展に大きく寄与した写真術は、人々の現実認識を大きく変容させたが、文学者はスタジオでポートレートを撮られることを受け入れながらも、意外なほど「写真術」を作中に描き入れることを拒否する。やがて世紀末にヴェルヌやヴィリエ・ド・リラダンが、写真術が当たり前存在する社会を描くことで、「暗室」や「カメラ」が文学テキストに出現することを論証した。

さらに再延長を申請し、迎えた最終年度(2023年度)においては、これまでの多岐にわたる考察を踏まえて、改めて研究の原典であるゾラの『ルーゴン=マッカール叢書』初期作品、『ルーゴン家の誕生』(1871)、『プラッサンの征服』(1874)、『ウジェーヌ・ルーゴン閣下』(1876)に立ち戻り、それぞれのサロンの表象を比較分析した。男性的な政治談義の場でありながら、女性が主導権をもつ社交空間という特性を、草稿段階から作家が意識し、空間の設定や人物の配置を入念に行ったこと、空間の開閉や連結、解体という一連のモチーフが後期作品にも連続性をもって展開されることを結論づけた。

6年間にわたる書斎、暗室、アトリエ、サロンという4種の私的空間の比較を通じて、文学、科学、造形芸術、音楽・演劇といった諸芸術の相互的発展が明らかにできた。

4. 研究成果

研究期間中(2018年度~2023年度)に、合計3回のフランス滞在を行い、研究者打ち合わせ、資料調査、文献蒐集等を行った。2019年2月のパリ滞在中には、フィリップ・アモン氏(パリ第三大学名誉教授)およびルネ=ピエール・コラン氏(リヨン第二大学名誉教授)に面談を申込み、ロマン主義、自然主義、象徴主義へと至る文学的潮流について、さらにフランスの若手研究者の動向について貴重な助言を受けた。2023年8月のパリ滞在中には、2021年に再オープンしたメダンのゾラ邸・ドレフュス事件記念館を訪れた。また、展示企画の中核を担ったアラン・パジェス氏(パリ第三大学名誉教授)にインタビューを行い、ドレフュス事件におけるゾラのアンガージュマンについての歴史的意義や最新の研究動向を確認した。これによって、メダンのゾラ邸が、21世紀のいまも現在進行形で「共同体の記憶の場」としての歴史的役割を担っていることが明らかになった。2024年2月のパリ滞在中には、2019年に改装され再オープンしたバルザックの家を訪れ、『人間喜劇』の草稿や人物相関図の展示を通して、「私空間」や「私生活」という主題の重要性を再確認した。研究期間を通じて、書斎、写真スタジオ、アトリエ、サロンという4つの私空間領域が、それぞれ諸芸術の交錯地点であり、作品が生成・受容される場として重要であることが明らかになった。

研究期間を通じて、単独論文7本、口頭発表2本、共著1冊(刊行準備中の共著1本を除く)を発表した。内訳は以下の通りである。

[論文]

1) 福田美雪「ウジェーヌ・ルーゴンの「雄弁」と「沈黙」——第二帝政下の「権威」と「自由」をめぐる——」、『仏語仏文学研究』第58号、東京大学文学仏語仏文学研究会、2024年8月刊行予定(頁数未定)。

2) 福田美雪「写真術の誕生と芸術家たち 緊張・交流・変化」、『青山学院大学文学部紀要』第64号、2023年、157-177頁。

3) 福田美雪「フェリシテ・ルーゴンの2つのサロン 『ルーゴン家の繁栄』と『プラッサ

ンの征服』読解』、『青山フランス文学論集』第31号、青山フランス文学会、2022年、110-136頁。

4) 福田美雪「『ルーゴン＝マッカール叢書』における音楽的モチーフ：パロディとオマーシユの間で」、『青山フランス文学論集』第30号、青山フランス文学会、2021年、44-76頁。

5) 福田美雪「19世紀小説における「工芸」への関心「産業」と「芸術」の調和を目指して」、『青山フランス文学論集』第28号、青山フランス文学会、2019年、20-38頁。

6) 福田美雪「パリ中央市場をめぐる文学的記憶 『パリの胃袋』における「音」が描く風景」、『フランス文化研究』第50号、獨協大学外国語学部、2019年、47-68頁。

7) 福田美雪「エミール・ゾラとメダンの家：演出された「文豪の私邸」」、『仏語仏文学研究』第52号、東京大学文学仏語仏文学研究会、2019年、151-169頁。

[共著]

1) 福田美雪「ジャポニスムへの情熱 ゴンクール『日記』に記された美術革命」、『人文学のレッスン』、小森謙一郎・戸塚学・北村紗衣編、水声社、2022年、71-96頁。

[口頭発表]

1) 福田美雪、「ブラッサンにおける「私空間」のゲーム フェリシテ・ルーゴンのサロンをめぐる」、自然主義文学研究会、2023年5月27日（慶應義塾大学日吉キャンパス）

2) 福田美雪、「近代フランスの芸術家小説が描く「創造の場」」、リアリズム文学研究会シンポジウム、2021年1月24日（オンライン）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 福田美雪	4. 巻 31
2. 論文標題 フェリシテ・ルーゴンの2つのサロン 『ルーゴン家の繁栄』と『ブラッサンの征服』読解	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 青山フランス文学論集	6. 最初と最後の頁 110-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34321/22655	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 福田美雪	4. 巻 64
2. 論文標題 写真術の誕生と芸術家たち 緊張・交流・変化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青山学院大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 157-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34321/22690	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 福田 美雪	4. 巻 [復刊]30
2. 論文標題 『ルーゴン＝マッカール叢書』における音楽的モチーフ：パロディとオマージュの間で	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 青山フランス文学論集	6. 最初と最後の頁 44～76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34321/22108	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Fukuda Miyuki	4. 巻 [復刊]28
2. 論文標題 「19世紀小説における「工芸」への関心 「産業」と「芸術」の調和を目指して」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青山フランス文学論集	6. 最初と最後の頁 20～38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34321/21136	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福田(寺嶋)美雪	4. 巻 52
2. 論文標題 エミール・ゾラとメダンの家 「文豪の私邸」から「記憶を継承する場」へ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『仏語仏文研究』(東京大学仏語仏文学研究会)	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 福田(寺嶋)美雪	4. 巻 50
2. 論文標題 パリ中央市場をめぐる文学的記憶 『パリの胃袋』における「音」が描く風景	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『フランス文化研究』(獨協大学外国語学部)	6. 最初と最後の頁 47-68
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計2件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 福田美雪
2. 発表標題 近代フランスの芸術家小説が描く「創造の場」
3. 学会等名 リアリズム文学研究会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福田美雪
2. 発表標題 ブラッサンにおける「私空間」のゲーム フェリシテ・ルーゴンのサロンをめぐって
3. 学会等名 自然主義文学研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小森謙一郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 319
3. 書名 人文学のレッスン（第一部第三章「ジャポニスムへの情熱 ゴンクールの『日記』に記された美術革命」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------